幕末明治期来日医学関係者リスト作製について

長門谷　洋　治

宗田一、蒲原宏、石田純郎、長門谷洋治の四名は雑誌『臨床科学』二三巻七・八号（昭和六十二年）に「来日医学関係者リスト」を発表した。これは同誌に昭和六十年四月より連載された「医学近代化と外人たち」全二十五回のあとを受けて、そこで触れられた六十名余の人物を中心に、各方面のエキスパートの助言をも得て、その時点で判明している来日医学関係者についてのリストを作製したものである。ただしなお満足すべき段階には程遠く、出稿直後から追訂が相次いだ。この状態は現在も続いており、さらに各位よりのご教示を得て、より正確度の高いリストにしたいと願っている。

来日医学関係者というも西洋人のみを対象とし、東洋人は入れていない。シーボルト来日の年一八二三年（文政六年）を上限とし、下限はほぼ一九一二年（明治四十五年）とする。来日というも旅行や短期間の訪日（たとえば明治四十一年のコッホの来日）や、日本側とほとんど接触のなかった者（大使館の職員など）は除外した。同伴の夫人・子息についても同断である。在日期間は最初の来日年と最後の離日年のみを記し、途中の一時帰国については記さなかった。中には日本で死去した人があって、これは没年でもあり†印を付した。

来日医学関係者の範囲をどこまでにするか、その名前をどのように配置するかは最大の問題である。もっともコンピュータ化すれば、入力さえしておけば目的にあった配列や、個々の情報の取り出しも可能であろうが、未だ力及ばない。ま

ず医学関係者であるが、医師がその中心となり量的にも最大となる。そして歯科医師・薬剤師・看護婦などがある。広義には医療福祉活動ともいうべき、たとえば救癩事業（ハンセン病予防事業）に従事した宣教師などもその対象たり得る。しかしこの救癩の分野のごときは、一部については詳しい資料があるものの、なお全体を把握できる状況にはないが、キリスト教史学者の助言も得ており、今後の展開が期待できる。

医師は臨床医とそれ以外の者に分け、臨床医のうち宣教医をはずしたものを生国別にＡＢＣ順に配列した。臨床医以外の医師には基礎医学者の他、医師資格がありながら他の職に就いた者などが入る。ただ医師にしろ看護婦にしろ、国によりその教育・免許制度が異っており、かつ当時はその制度すら流動的であった場合が少なくなく、それを前提にリストを見る必要がある。

各人についての収録事項は㈠氏名（原綴り）㈡邦語表記㈢国籍㈣在日期間㈤主たる所属・専門・在任地で、宣教医などの場合は㈥所属ミッション（略名）が入る。不明、不明確な部分は空白のままか、?マークを付す。また女性には○印を、『岩波西洋人名辞典』（昭和五十六年）に収録されている人には※印を付した。一、二を例示すれば以下のごとくである。

※ Scriba Julius, スクリバ, 1881～1905†, 東大一外科・皮膚科, 聖路加病院〔ドイツの項〕

Schwartz, Herbert W., シュバルツ（スワーツ）米, 1884～1916, 仙台, 東京, 弘前, 英語教師, MEFB〔宣教医の項〕

○Shaw, Fanny Jarvis, ショウ, 英, 1881～85, 築地, パーム病院（新潟）, 聖バルナバ病院（大阪）, 長崎？

雑誌発表時点での簡単な統計を述べれば総数二一三名、うち医師が一五五名（七二・八％）国別では来日者の最も多いのは米国で七五名、次いで英国の五三名で、以下ドイツ三八名、オランダ二一名、フランス一八名、その他八名である。

来日年次別では一八七〇～七九年に来日した者が最多で一〇一名（四七・四％）次いで八〇～八九年二七名で、以下六〇～六九年二五名、九〇～九九年二〇名、二三～五九年一七名、一九〇〇年以降一四名、不明九名となっている。

来日医学関係者のリストとしては、中野操氏が「来朝外国医家名簿」（『皇国医事大年表』昭和十七年所収）を明らかにされ、中川米造・長門谷洋治は「来日外人医学関係者名簿」（『医学史研究』三二号、昭和四十四年）を公けにした。その後オランダでの現地調査などを踏まえて新知見を提供する人がでてきたりして、かなりの改訂が必要となった。しかし非力ゆえ、なおそれらの情報を充分に盛り込むまでには至っていない。

（豊中市）